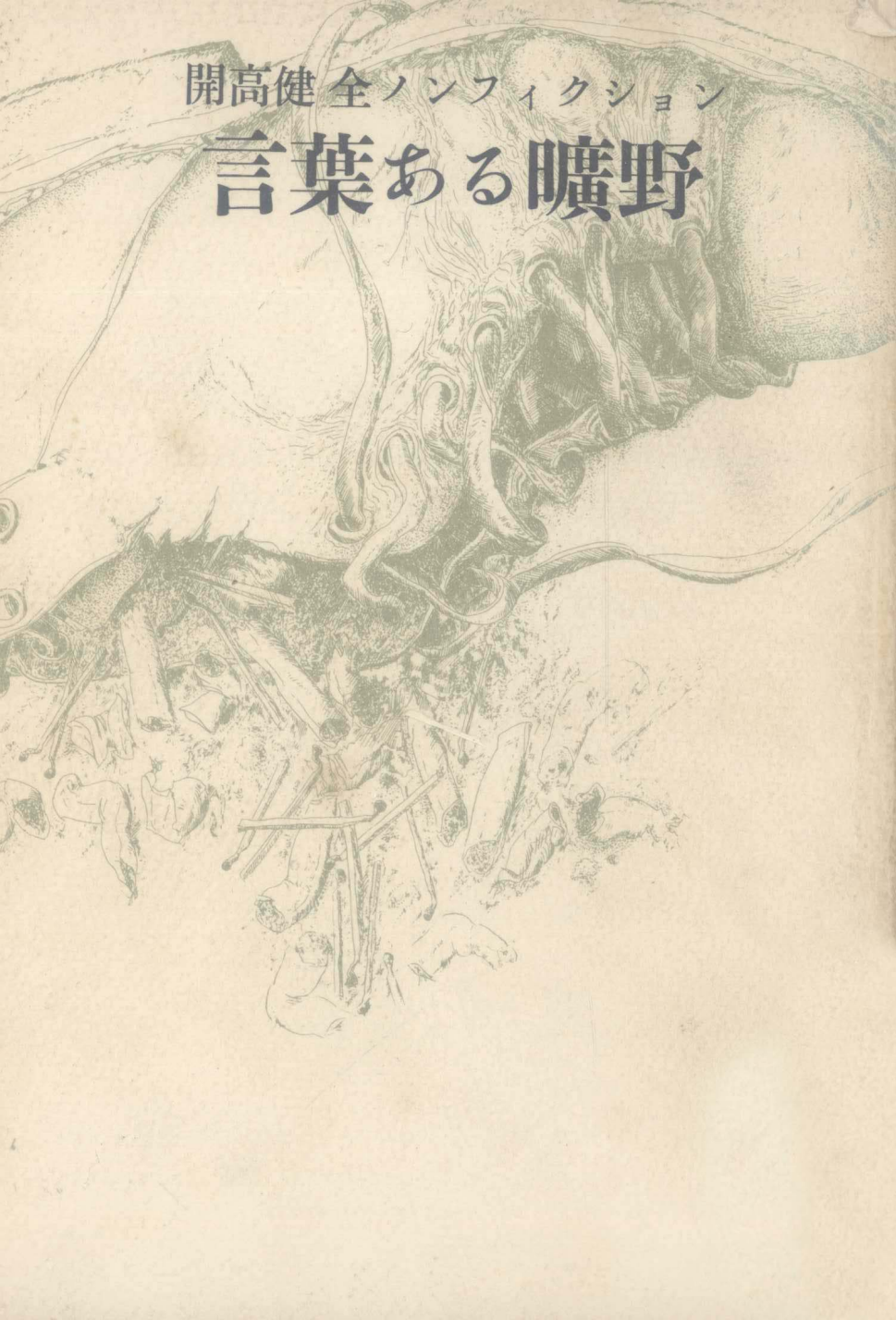
開高健全ノンフィクション

言葉ある曠野



言葉ある曠野

開高健全ノンフィクション

VOL V

文藝春秋版

言葉ある曠野　開高健全ノンフィクションV

1977年10月15日　第1刷

著　者　開高　健
発行者　樫原雅春
発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3　電話(265)1211(代)
定　価　2700円

印刷所　凸版印刷株式会社
製本所　中島製本株式会社

© Takeshi Kaiko 1977　printed in Japan

言葉ある曠野・目次

I

困る……九
驚く……一六
見る……二三
続・見る……三〇
学ぶ……三七
遊ぶ……四四
書く……五一
余技る……五七
解禁する……六四
読む……七〇
続・読む……七七
枯渇する……八三
励む……九〇

●証言する……九八

II

人とこの世界

行動する怠惰　広津和郎……一三九
自由人の条件　きだみのる……一四八
マクロの世界へ　大岡昇平……一六九
誰を方舟に残すか　武田泰淳……一八七
不穏な漂泊者　金子光晴……二〇四
カゲロウから牙国家へ　今西錦司……二二〇
手と足の貴種流離　深沢七郎……二三三
流亡と籠城　島尾敏雄……二四六
惨禍と優雅　古沢岩美……二六〇
〝思い屈した〟　井伏鱒二……二七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

絶対的自由と手と　石川　淳……二八五
地図のない旅人　田村隆一……二九八
河出書房新社版・あとがき……三一三
●世界カタコト辞典……三一四

Ⅲ

紙の中の戦争

深沢七郎「笛吹川」の場合……三七三
桜井忠温「肉弾」の場合……三八二
芥川龍之介「将軍」
　田山花袋「一兵卒の銃殺」の場合　三九六
火野葦平「土と兵隊」
　石川達三「生きてゐる兵隊」の場合　四〇三
今日出海「山中放浪」の場合……四二四
大岡昇平「俘虜記」「野火」
　武田泰淳「審判」の場合……四三六
富士正晴「帝国軍隊に
　於ける学習・序」の場合……四四六
安岡章太郎「遁走」の場合……四五八
藤枝静男「犬の血」
　「イベリット眼」の場合……四六七
長谷川四郎と田村泰次郎の場合……四八〇
梅崎春生の場合……四九四
島尾敏雄「出孤島記」の場合……五〇一
原民喜「夏の花」の場合……五〇八
井伏鱒二「黒い雨」の場合……五一九
J・ハーシー「ヒロシマ」の場合……五二九
愉しみとしての原爆作品群……五四〇

Ⅳ

告白的文学論……五五五
オセアニア周遊紀行……五七九
私の民話論……六三一
あまりにもそこにある……六三七
ワイセツの終焉……六五三
●頁の背後……六六五

言葉ある曠野

装画／ギュンター・グラス

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

困る

北海道の東部には広漠とした手つかずの原野がひろがっていて、それは東ヨーロッパ、シベリア、アラスカの風景を私に思いださせてくれる。その荒野のことを、ふつうには、〝根釧原野〟と呼んでいる。しかし、根室の国ではそう聞いたが、釧路のあたりでは、これを、〝釧根原野〟と呼んでいるのを聞いたように思う。一つの共同の面積が自分の住んでいる場所によって呼びかたが変ってくるのである。

釧路の郊外には四万ヘクタールか五万ヘクタールかの原始の大湿原がひろがっている。ここには野生のタンチョウヅルやミンクやアオサギなどが棲みつき、川を小舟でおりていくと、アシの密林のなかをゆっくりとした足どりで、頭を高くかかげ、まるでダチョウかラクダのようにタンチョウヅルが歩いていくのを見かけたことがある。ツルの鳴声はカタカナにしいてなおすと

クァーン…ルルルルーン…

となるだろうか。

この大湿原は見わたすかぎりぼうぼうとしたアシの原野だが、苔とも草ともつかないツンドラの荒野であって、踏んでいくと、ふわふわボカボカと厚く柔らかいのだが、何となくしっかり踏みしめられない不安感が脛につたわってくる。ここに〝ヤチ〟とか、〝ヤチノメ〟とか、〝ヤチマナコ〟などと北海道人が呼び慣らわしている、恐るべき自然の罠がひそんでいる。苔にかくれていて見えないのだけれど、うっかり一歩踏みこむと、ズブズブと沈みかかり、たちまち全身を呑みこまれて、身うごきできなくなり、やがて埋没してしまうという曲者（くせもの）である。サケの密漁をしに札幌あたりからやってきたヤクザ連中がときどき姿を消してしまうということがあるらしい。私をイトウ釣りにここへ誘って下さった佐々木栄松画伯の

教えるところでは、川岸をいくときは、雪山のぼりのときとおなじように私の踏んだ足跡を踏んで、そこからはずれないようにして一歩一歩ついてきなさいとのことであった。底なしの〝野地の目〟を避けるには、長い頑丈な棒を杖がわりに持っていくということをする。一歩ズブリッと踏みこんだと知ったらすかさずその棒をよこにして穴にかけわたすようにする。そして、ズブズブぬらぬらするばかりでシッカリした足場が何もないのだから、あとはひたすらその棒にすがって、体力のむだな浪費を避けつつ、じりじりと這いあがる工夫をしなければならない。あせってはならない。やたらにもがくのもよくない。何度かあやういところでぬけだした経験のある画伯から、釧路にもどってから、ヤチノメの恐しさをじっくり教えられたものだった。

東京にもどってしばらくしてから、私は親しい友人の一人の北海道出身者と、道東の原野でイトウ釣りをしてきたことを話しあい、生きたドジョウを鈎に刺すにはどうするか、イトウは鈎にかかるとどうあばれるか、野生のタンチョウヅルはどう鳴くか、などと、説明にふけった。そのときふいに私はヤチノメのことを思いだし、画伯の話をこまかく思いだした。そしてつぎの瞬間に、啓示があった。私はその友人にヤチノメのことをきいたままにつたえたうえで

「……ところで」

といった。

「女のあそこのことも北海道じゃ、ヤチとか、ヤチノメとか、ヤチマナコなどと呼んでいるのではないかナ。正確にそうではないとしても、それに類するコトバで」

友人はしばらくもじもじしたあとで

「そうです。図星です」

といって、ちょっと顔を赤くした。

「まさにそのとおりです」

「そうだろうね」

「どうしてわかりました？」

「いや、そう思ったまで」

私は瞬間の連想が的中したことをひそかによろこびつつも、むしろ、ボウボウと果てしないアシの大湿原のあちらこちらにさりげない顔つきのくせに底なしの性悪さ

で待ちかまえている罠のことを、その声なき貪婪のことを、うつらうつら思い浮かべていた。

つぎの挿話も北海道のことなので、ドサンコ諸氏にはちょっと申訳ないような気がする。いつか積丹半島の突端へ冬のさなかにいったことがあるのだが、ここは大雪があると〝陸の孤島〟と化してしまうところで——少くともいまから十年近い昔にはそうだった——山が背に迫り、海が腹に迫り、耕地はひとかけらもなく、しかもその海がとっくにニシンが群来なくなり、死んでしまって、ただ三角波がすさび、叫びたてるばかりという、手のつけようのない地の涯だった。トントンぶきのマッチ箱のような家がフジツボほどの堅牢さもなく磯にしがみつき、刃物じみた冬の波の狂うなかを岩から岩へ老婆やおかみさんが腰まで水につかってイワノリをひッ掻いてうごめいている光景が見られた。これはいわゆる〝海苔〟ほどの華麗な香ばしさを持たないけれど、淡泊、素朴、あえかな風味があって、おにぎりを巻いたりするときに使うと、ちょっといい味なのである。ただし、どれだけつらい思いをして採ってくるものかを目撃したら、ちょっと高い声で批評できなくなるし、不満も口にできなくなる。

吹雪まじりの疾風がくるたびに家がぐらぐらゆれ、窓から粉雪がザッ、ザッと吹きこんでくる『蛸寅』旅館のあぶなっかしい二階で、キルティングを着こんだまま酒を飲んでいると、どこからともなく筋骨頑健、見るからに丈夫一式という姿の姉上があらわれた。彼女は昼の間は沖からもどってきた漁船をロクロで浜にひきあげるヨイトマケに従事し、夜ともなればポンと宙返りしてくちびるに紅をさしてあらわれるという、その道の達人のように思われた。彼女は膝をくずして酒をつぎつぎとあおり、もっぱら豪快・強健・爽快にふるまい、ここはソーラン節発祥の地だから、本物中の本物のを唄ってあげる、これこそが本物なのだ、あんたがたの知ってるのはテレビ用のウソ歌だといった。そしてつぎのような一節のあるソーラン節を音吐朗々、吹雪風と争いつつうたい、そのあとフッと消えた。

かがみまたいで
うがちゃんこながめ

うがちゃんこながめて
うがわらう
……
……

姉上が消えたあとで私はキルティングのままふとんにもぐりこみ、翌朝、うそうそと寒くて眼をさますと、窓から吹きこんだ雪が枕もとに小さな長城を作っているのだった。非凡のナルシシズムを剛健な労働歌に托しておおらかなユーモアのうちにとかして茶にしてしまうという時業(はれわざ)をやってのけたラブレェの末裔の姿はどこにも見えず、もそもそ身うごきする階下の足音や薬罐の音などにも気配が聞きとれなかった。私はふとんのなかで、〝ちゃんこ〟というコトバの航路を思った。明治初期の書物を読むと、現在標準語で××××と呼んでいるもの、あるいはことを、東京の下町では〝ちゃんこ〟と呼んでいたと、ハッキリでているのである。それが現在、東京では〝ちゃんこ鍋〟のほかには何事も感知されることがなく、ここ積丹半島ではいまだに語源のままに使われている。しかも流行のトップを気どっているはずの東京のアングラ・ソングにもないような繊鋭の観察眼をうたいのけている。

いったい日本語はたかだか百年のうちにこうも変ってしまっていいものなのか。『冬の夜はホカホカとあたたかいちゃんこ鍋で』などと看板に堂々と書かれているが、百年とはいわずもう五十年もすればこれが、「冬の夜はホカホカとあたたかい××××鍋で』となるのであろうか。

銀座をいく母と娘が、大きな声で
「冬の晩はやっぱり××××ねえ」
「何てったって××××よ」
「××××だと第一あたたまるし」
「そうよ。フランスのポ・ト・フだって、ブイヤベースだって、いってみれば××××鍋みたいなものじゃない。何しろ栄養があるし。ボウッとして気持いいじゃない。ねえ、ママ、早くお家へ帰って××××にしましょうよ」

こう書いてくると、きっとあなたはヒヒヒヒとよこを向いて笑ったり、イヤな感じになったりなさるが、それはあなたが無学であり、想像力がおありでないからなの

である。コトバの恐るべき不死身ぶりにおびえたことがおありでないからなのである。

もう十年も昔のことになるが、その頃私は冬になるとスキーをかついで雪山にかけつけたものだった。人なみに志賀高原、蔵王、赤倉、関、燕と転戦してまわったものだったが、文藝春秋社のヒュッテが高天ヶ原にあるので志賀高原にはいちばん熱心にかよった。テクニックはさほど上昇しなかったけれど早朝の洗濯板のようなアイスバーンに頭をカチンとぶっつける快感や、夕暮れのヒュッテに帰ってからのホラ吹き合戦や、雪のなかで冷やした赤ぶどう酒の味などについては、いささかおぼえるところがあったように思う。その頃の私のテクニックでは〝滑る〟というよりは〝泳ぐ〟とか〝漕ぐ〟といったほうが正確だったが、丘やゲレンデや螺旋道などを一日じゅう上ったり下ったりして飽きるということがなかった。

へとへとにくたびれて夕方、発哺、熊ノ湯の宿にもどってくる。ここの炉ばたで一杯やってからよちよちと坂をのぼって上の高天ヶ原のヒュッテに帰るのがコースとなっていた。宿のおじさんに茶碗酒をもらい、ちびちびすすりながら、炉のまわりに集った少女たちの話を聞くともなしに聞いていると、しきりに〝アリノトワタリ〟、〝アリノトワタリ〟という声が耳に入る。ここから草津へこえるツアー・コースに竜王越えというのがあるが、その途中のどこかに〝アリノトワタリ〟というポイントがあるらしい。私はまだ試めしたことがないのだが、この頬の赤い、眼が痛烈にいきいきしている、生への興味がまぶたのふちまであふれだしてさざ波のように輝やく娘たちは、明朝、そこを突破しようとして作戦を練っているらしかった。しきりに〝アリノトワタリ〟、〝アリノトワタリ〟といって笑ったり、論じたりしている。何という大胆不敵！

「……その〝アリノトワタリ〟ってのは、狭くてつるつるしてるの？」

「そうよ。尾根ですからね。朝早くなら狭くてつるつるしてるわよ。ちょっと危いわね。スリルあるの」

「木がちょっと生えてるの？」

「うん、そう。ブッシュってのかナ。ボサってのかな。ポワポワ生えてるわね。そこを一列になっていくのよ。

いい眺め。でもないか。でも、ちょっと」

ジュースなど飲んだりしてわけもなくワッと笑いころげたりする。私は手帳を一枚やぶって、『蟻の門渡り』と書いてから娘の一人にわたし、東京へ帰ったらちょっと辞書をひいてみてごらん、忘れちゃいけないヨ、といって宿をでる。こういう放埒な無邪気、あっぱれな大胆に出会えるのも、スポーツの功徳というものであるか。

いまためしに三省堂版、金田一京助監修、『明解　国語辞典』をひいてみると、つぎのように説いてある。

ありのとわたり⑤〔蟻の《門渡り》〕(名)(一)ありの行列。(二)陰部とこうもん（肛門）との間。会陰(ェィン)。

狭くてつるつるしていて、尾根で、ボワボワとボサが生えている、ちょっと危い、いい眺め、でもないか、でもちょっと、と感じられるらしいその地形を眺めて、そう命名したのは、一人なのだろうか。複数なのだろうか。それがそのまま語義を感知されたり、されなかったりでも世々代々ひきつがれてきたらしい強力さを考えるなら、そこはよくよく因果な風貌を帯びているのであろう。もしその命名者がこの貧しい山村の先祖であるのなら、その人物はよほどエレガンシャルムをわきまえていた。かの大湿原といい、積丹半島の『蛸寅』の姉上といい、この山村の粋人といい、じつにその観察眼の鋭さ、ユーモアの妙、類推想像力の飛躍、何よりもその不敵な率直さ、ただ私は虚をつかれて茫然となる。言語生活はあくまでも具体に執し、具体から出発すべきであると、教えられるようではないか……

こういうふうに事態を追ってくると、さいごに私自身が対象となってくる。私の姓は『開高』、名は『健』であるが、名は私の父母がつけたけれど、姓はいつ頃からとも知れない御先祖様の発想による。これは福井県である。現在、丸岡町と呼ばれているが、戦前は〝坂井郡高椋村〟と呼ばれていた村で、この村のことは中野重治氏の『村の家』や『梨の花』にくわしく書かれてある。おぼろに祖父や父から聞かされたところではわが御先祖様は柴田勢の落武者で、関ヶ原のあと、流れ流れて北陸にたどりつき、定着した。その後、分派現象が発生し、一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com